



昭和 48 年 (1973 年)
1 月号 (No. 331)
社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

昭和 47 年度年次晩餐会	板倉勝正	1
新・永年会員紹介	成瀬岩雄	1
年次晩餐会のこと	成瀬岩雄	1
会員消息		2
年次晩餐会出席者		2
「武田久吉著作展」目録		2
名誉会員三氏追悼講演	松本善二	2
	藤島敏男・茶谷東海	3
名誉会員三氏追悼会出席者		10
会務報告		
上高地山岳研究所募金状況		1
第 6 回国際生気象学会	中島道郎	5
福岡・東九州支部合同懇談会		
	吉沢一郎	5
岐阜支部設立さる		5
もみじ会報告	佐藤テル	6
鳥海山懇親山行報告	深田志げ子	7
『山岳』第 66 年の件	中島 寛	7
図書室便り		8
昭和 47 年度除籍者		9
昭和 47 年度通常会員出席者		10
10・12 月支部長会議報告		10
12 月理事評議員会		10
ルーム日誌・会員異動		10
新入・復活会員・住所変更		11
本文		
南アルプスと人間 <上>	山本朋三郎	6
山と蝶のものがたり ⑥	春田俊郎	9
会員通信		
文化功労者に西錦司氏		5
秋の叙勲 (伊達、小島氏)		5
図書紹介		
ヘディン伝	板倉勝正	8
極点往復の一評価	島田 巽	8

昭和四十七年度年次晩餐会

昭和四十七年度年次晩餐会は十二月二日午後六時から京王プラザホテル四階で開催。控室の一隅には武田久吉著作展(第十一回この一本展)が設けられ、武田家出品の珍しい書物、写真、登山用具などが展覧された。また、丹部理事の肝煎りで会名入りの氷柱が飾られ多数の会員で賑わった。

席を移して定刻開会。先ず三田会長のあいさつと会務報告。ついで名誉会員三枝守博氏の乾杯にはじまり、新永年会員三人(別記)に永年会員章を、名誉会員十人に名誉会員章を贈呈。新永年会員を代表して野口末延氏があいさつされたのち、名誉会員松本善二氏よりお話があった。一本展について伊倉常務理事から報告があり、近藤理事より欠席会員から寄せられた消息の披露がなされたが、この頃より控室で早くも飲んでいた司会の中屋名誉教授が減多やたらに指名を始め、本誌記録係の板倉まで酷罰してメモをとることを失念したので、以下の記事に誤脱がある。

ればひとえに筆者の責任である。本年は旧に復して着席としたため、多くの先輩諸兄のお話を最後まで静聴できたのは幸せであった。

今西錦司(新岐阜支部長)氏が文化功労者を訂正したり、藤島敏男名誉会員(喜寿)が言葉は優しいが、相変わらず憎らしいことをいったり、佐藤テルさんが女性登山家達に女性としての心づけを説けば、一方、伊藤秀五郎北海道支部長は西に今西、東に伊藤あり(？)、来年の現地小集会にはぜひいい会員を誘えヨーロッパアルプス登攀術を披露すれば、周布光兼氏がしんみりと復活会員の弁を述べ代わっては、来年のヤルン・カン遠征隊長、西堀栄三郎氏が、ついでエベレスト南壁をめざす第二次 R・C・C 隊の湯浅道夫氏がそれぞれ抱負を語るなど、さすがは日本山岳会ならではのという賑々たるメソバが出演した。晩餐会が盛りあが

ったころをみはからって林常務理事が立ち、上高地山岳研究所の完成が間近であることを報告、同時に会員の寄附が六〇%台であることについて協力を訴え、最後に田口二郎評議員が、山岳会の会員は一年会わぬとも昨日会ったような気がする仲間である、来年もきつとまた会おうと締めくくりに、七時半おひらきとなったが、出席者は会場のそこそこで歓談をつづけ、跡かたづけたのち解散をしたのは九時近くであった。

今回の会場設営に尽力された丹部理事、伊倉常務理事をはじめ関係者に厚くお礼を申し上げる。(板倉勝正)

新・永年会員紹介

野口末延氏

明治三十一年十二月四月、前川満寿雄氏の紹介により入会。会員番号八〇六番。小学二年のとき相州大山に登り、生来の旅好きと相俟って各地の山々に足跡を印した。赤城の猪谷旅館に山崎金次郎氏と同宿したのを機縁に、霧の旅会に入会。木暮理太郎、武田久吉両氏の薫陶を受けた。大正十五年、松本善二、吉田久兵衛両氏

とともに谷川岳連峰の初縦走。戦前戦後、会の幹事・監事として本会の運営に尽力された。このたび永年会員章をうけて氏は「山岳会に入ってから人生にプラスするものの多かったことは幸せです。まだまだ多くの山々に登りつづけたい」と元氣な笑顔をみせられた。

吉田久兵衛氏

明治三十四年八月年十二月、松本善二氏の紹介により入会。会員番号八二六番。大倉商業在学中に、木曾御岳、白馬岳に登り、以後、穂高岳、立山連峰、黒部などに足跡を残した。また霧の旅会の一員として活躍。大正十五年、松本善二、野口末延両氏と谷川岳連峰を初縦走。樺太、満洲の山々にも足跡を印した。氏は浅倉屋書店十一代目の当主だが、永年会員章をうけて「天皇誕生日に賜杯をいただいたときよりうれしかった。山岳会に在籍したことのおかげをひしひしと感じます」と語っておられた。

山崎金次郎氏

明治三十一年五月年十二月、松本善二氏の紹介により入会。会員番号八二七番。大正八年、府立工芸学校時代の級友松井幹雄氏らと霧の旅会を創立。その主要メンバーの

年次晩餐会のこと

今年度の晩餐会において特筆大書しなればならないことは名誉会員の三枝守博さんのご出席があったことである。過日、何十年振りかで、中屋常務理事と同道、三枝さんのお宅をお訪ねし、お元氣な様子に接して先ず安心。本年八十六歳を迎えられたとのお話でつい昨年まで時折、低い山にも行かれたが昨年夏肺炎をわずらわれてから、慎重に引込み勝らだとのことであったが、昔のお話、辻村伊助さんと嘉門治を連れて穂高に登られた時、辻村さんがへんな歩き方を、登り方をされるのでよく聞いて見ればその昔熊撃ちの狼の時にいらい足を掻き痛めた嘉門治が、へんな歩き方をされるのを「山登りはあのような歩き方が一番いい」と心得て嘉門治の真似してののですよ……」などというお話から「赤石岳登山の節、三十三番の会員章を粉砕し改めて交付して貰ったら三十五番になっている」と聊かご不満のお話など、そのほか何れも明治三十六年頃という、我々などの

上高地山岳研究所

募金状況 (47・12・25 現在)

* 応募件数 四二四件

* 金額 三、五八二、四〇三円

* 目標額対比 七一・六%

知る由もないお話に我々二人は唯々驚きと爆笑に楽しき時を過ぎていた。だが、これが出来たのは誠に幸甚の至りであった。

我々の怠慢で名譽会員の贈呈が今まで実現出来なかったのを今回漸く年次晩餐会場において差上げることに

なつたので、ぜひ出席いただきたい旨申上げたところ、快くお引受け下さり、当日は初冬の到来を告げる寒風の吹き渡る夕刻に拘らず遠路ご出席いだいたことは出席者一同、一層の喜びを感じたのではないだろうか。多くの会員がまだお目にかかったこともないし、このような機会に大先輩の風貌を接し、乾杯の音頭をとっていただけるといふことは、創立七十年記念も間近い本会の晩餐会も最早、単なる食事会、交歓会だけでは、重要な行事の一つとして我々末輩若輩は大いに責任を感じなければならない。ことに当夜は各地方支部長もご出席されており、ご本人も帰宅後、ご身体にお差障りもなく非常に満悦であったとは翌日夫人からのお電話でのお話であった。

それにつけても兼に相次いでなくなった武田、田部、鳥山、牧野の各名譽会員諸氏にこのたびの名譽会員贈呈が間に合わなかったことは誠に申しわけなき次第、恐らく出席会員一同も同感ではないだろうかと思う。なお、三枝さんとは同年と伺っている辻村太郎さんのご出席がなかったのは残念であったが、近日お訪ねしたいと思

会員消息

年次晩餐会案内状の返信に近況欄をくわえたところ、欠席会員からは

いろいろと消息をお知らせいただいた。晩餐会の席上、近藤理事よりそのうちの十数通が報告されたが、藤島敬男氏をはじめ多くの方から会報に掲載せよとの声もあって、ここに紹介することにした。(編集部)

田中薫氏 やむなき結婚媒酌のため出席できません。御盛會を祈ります。

さる八月、モントリオールでの国際地理学会議出席のため、七月カナダに入り、カナディアン・ロッキーの観光ルートを巡遊しました。今夏は国際自然保護連盟の大会がバンフ国立公園で、またイエローストン国立公園百年祭が米国の同地でなされるなど、環境保全の国際世論の反映の年と感じました。

榎有恒氏 拝復 御案内下されあり。たく御礼申し上げます。あいにく差し支えのため先礼いたします。

松方三郎氏 前からの約束があり出られませんが、何卒皆さんよろしく。

栗飯原健三氏 御会入会させて戴いて五一年目、思ひもかけぬ方面に道がひろがり、老境に入った今日、山の実践からは遠ざかりましたが、たのしい道を歩んで感謝です。

小島栄氏 武田久吉君が高野鷹蔵君と、まだ二十一、二の時から、紹介状を持たずに吾家に来り、僕が応対に出たが、身が分らぬため、長期間寒空に兩名を戸外に待たせた昔を想い出し、彼も最近死し、僕も八十四、五歳になり、未だ休日毎に登山しているが、これを仕合せと思っている。

中司文夫氏 七十一歳になつても、肺が半分になつて、胃袋が四分の一になつても、相変わらず山には行っています。今月は涸沢の雪をふんで来ましたが、ウエスタン祭りは止めたらどうですかね。戦争末期、取りはずすのに苦労したので。観光の片棒をかつぐこともないでしょう。

尾崎喜八氏 五年かかった仕事を終わって、只今一休みしております。
犬飼哲夫氏 昨年四月に開館になった北海道開拓記念館(道立博物館)の初代館長としています。

フスコ・マライニ氏 目下、日本ベンククラブの招待で京都での日本文化研究国際会議に出席中ですが、来る十一月三十日、帰国の予定。

中島正文氏 中風でもありますが東上すること出来ません。もっぱら原稿の執筆に苦しんでいるわけ。黒部奥山の研究も上高地あたりの研究も資料が沢山あるにはありますが、左手の執筆には閉口です。富山県山岳会員の不甲斐なさ。立山を遊覧場所視した所業は怪しからんと思う。どうも事業家と結びついたものは……。

井手貴夫氏 ドイツ政府の招待で八月十五日から渡独。ついでにスイス、リヒテンシュタイン、オーストリアをまわってきました。ツェルマットは快晴でしたが、グリーンデルワルトは霧が深く、あまり天気はよくありませんでした。ジュネーヴの所へよりまわりましたが、むかしの空気はなくなりました。インスブルックから登山電車で裏山に登ったついでに、雪に蔽われた尖峰を一つ岩登りしてうづぶんを晴らしました。皆さまよろしく。

宇野佐氏 自然保護と地域問題で悩んでいます。山岳会からは大雪山道路の反対要望もあり「板ばさみ」です。出席して皆さまの御意見もかがいたいのですが、当日は役所の課の行事があり残念です。(注・宇野氏は環境庁自然保護局計画課長)

石田吟松氏 半月ほど旅行して本日帰宅いたしましたので、欠席いたしました。

中村謙氏 近頃は歩くことが見るも哀れな有様で、夜の外出は一切やめています。練習はしていますが、なかなか

か思うにまかせません。しかし、何とかして直したあつきには必ずお伺いいたします。

黒田初子氏 目と膝に故障があり弱っています。しかし調子のいいときはスキもやっております。

浅利欣吉氏 来年度の北海道現地小集會には、微力ですが、お手伝いさせていただきます。いろいろと張り切っております。

平野明氏 北海道における支部長会議と併行記念山行は伊藤支部長を中心に入受実行委員会を発足させ準備に着手しました。皆さま来年度六月はお揃いで北海道へのお出でを待っています。

野村哲也氏 ネパールに申請していったタウラギリIVはオーストリアに許可があり、明春は行けなくなりました。七四年を過ぎて再申請します。この夏はカナディアン・ロッキーに遊びに行きました。なお来年は仕事のほうでしばらくネパールに滞在の予定。

色川大吉氏 昨年はリスボンからカルカタまで自動車で放浪したときのことを、今、中央アジアを中心にとめていきます。

松村高氏 去る八月一日、新雪の積った中をマッターホルンに取りつきましたが、ソルベイ小屋のあたりから、ガスと雪で四一〇〇mあたりと考えられる場所から残念ながら退却(降りて翌二日に七十七回目の誕生日祝をやるつもりでしたのに)。当日、英国人一人遭難、日本人一人大怪我だったのをみて退却してよかったとおもっています。あと三、四年小遣金をためてモンブランとモンテローザに登りたいと、目下ドイツ語を勉強中です。

春田俊郎氏 「一本展」の解説を書いた責任上、どうしても出席せねばならぬ立場ですが、当日午後四時から別の会合があり、出席できず残念です。

「武田久吉著作展」目録

年次晩餐会の会場における恒例の「この一本展」(武田久吉著作展)は参會者の注目をあつめました。春田俊郎氏執筆の目録は、当日の出席者にお配りしましたが、残部(約五十部)は実費二百円でお頒けすることになりましたので、ご希望の方は事務局までお申込み下さい。

年次晩餐会出席者

安彦六郎 穴田雪江 愛知俊之 青木一夫 秋山宏明 青木昇 浅原重雄 網蔵志朗 伊倉剛三 今井嘉道 板倉勝正 岩瀬浩 岩水信雄 今西寿雄 池田光二 入沢郁夫 伊藤秀五郎 伊吹一郎 石坂昭二郎 今西錦司 上田富雄 漆原知栄子 宇田久太郎 遠藤光男 遠藤登 遠藤泰司 織内信彦 大橋晋 岡田幸雄 大野俊夫 大森薫 小倉童子 小倉茂輝 岡田みち子 萩野恭一 萩野春子 奥山文次 小原勝郎 折井健一 大野義徳 川森左智子 勝田房治 風見武秀 加納一郎 神谷恭 金坂一郎 加治甚吾 川北仁 冠木伊右衛門 河村栄二 笠原潤二郎 神原忠夫 鎌内章 木村勝久 菊池修身 木下是雄 菊地文雄 黒石恒 藤信行 小林猛臣 小西政明 島向俊彦 向後紀代美 小島徳興 児島勲次 河野幾雄 佐藤達夫 三辺夏雄 佐藤テル 坂下心一 桜井信雄 佐藤久一 朗 佐々保雄 坂本 幹 斎藤桂 齋藤健治 三枝守博 柴田殿太郎 島田興 嶋原啓佑 進藤波母 島根康郎 柴田均二 清水春美 島田興史朗 杉浦一 須田紀子 周布光兼 関根吉郎 瀬名貞利 田口二郎 伊達篤郎 田中元 高山忠四朗 高木碩男 竹田寛次 丹部節雄 田村扇一 武田満子 田畑真一 高田真哉 高橋定昌 谷口現吉

茶谷東海 津田周二 鶴見敏彦 徳久
球雄 外山義夫 鳥居亮 土橋進一
中屋健次 中保 名須川浩 永田崇嘉
中島寛 中田勇吉 長尾徳夫 中野征
紀 成瀬源雄 永井清一 西堀栄三郎
錦織保清 西沢健一 西丸震哉 沼倉
寛二郎 野上成男 浜正則 早川義郎
羽田栄治 林和夫 半沢松 原謙一
日高信六郎 平山武志 久野英子 広
羽清 二木信次 福田文二 藤井運平
福井正吉 藤島敏男 船越好文 堀内
章雄 細川沙多子 雪標山岳会本多昭
一 堀田弥一 増田洋子 牧野文子
牧野四子吉 松永敏郎 松本熊次郎

名誉会員三氏追悼講演

去る十一月十一日、臨時総会にひきつづいてお
こなわれた本会名誉会員故武田久吉、故鳥山悌
成、故田部重治三氏の追悼会の席上における講
演の要旨を収録しました。

松本善二氏講演

私はお三方とは年配のほうも山のほうもほとんどおなじでありまして、いわば私の先輩であり先生であり、また友人として親しくおつきあいをしてきました。鳥山さんとは昭和八年からいっしょに山岳会の会計理事をつとめて長く一緒にいたが、山登りは武田先生、田部先生のお二人とよく同行しましたばかりでなく、山の知識は全部この御両所から教わったのであります。ことにいけばお世話になったのは武田先生であります。そのころお母さんとお二人で富士見町の邸におられまして、私も身軽でありましたからヤアとてんで出かけていきまして口角泡をたばして山の話にふけつたものです。時間なんぞ忘れてしまつて夜中の二時ごろまでしゃべりつづけてました。お前たちは何でそんなに話があるのかと、

松本善二 松本義夫 松田雄一 宮下
秀樹 三田幸夫 三浦巖 村田恭郎
村尾金二 村岡純 村井米子 望月達
夫 百瀬泰太郎 森川洋佑 森宏子
山崎安治 安川茂雄 山口節子 山田
哲郎 柳安子 山本良三 山下久男
山村正光 山口滋嗣 山口健児 山内
寿男 女子登攀クラブ山崎茂利江 尹
官炳 湯浅道男 湯川竜二 芳野起夫
横山厚夫 横田明男 吉武正子 吉村
健児 吉阪隆正 吉沢一郎 渡辺正明
矢野拓 渡辺文明 招待者 武田直子
武田澄江 野口末延 吉田久兵衛 山
崎金次郎(計一九五名)

お母さんから不思議がられたことも再々でした。そのころタクシーはありませんでした。私は富士見町から浅草まで歩いて帰つたものでした。武田先生は江戸っ子を超えたような江戸っ子で、私とはたいへんウマがあいました。その時分、私は鳥山さんとおなじように銀行畑にいたのですが、あんまり休むので上司におこられました。そのため職業を棒にふるたのです。お前みたいな奴は銀行をやめるか山をやるかどちらかにせよと言われ、即座に辞表を書いて、登山業と業をあらためた次第であります。私の山登りはほとんど武田さんや木暮理太郎さんと同行したのですが、三人の間には固い約束があった。そのうちの誰から山の召集があったら、どこへ行くのか、何日かかるかは一切聞かない。こういう調子で山旅をやつたものです。電話をか

けたらすぐ集まれ。ところが、木暮さんのところだけ電話がなかったので、葉書一本くるとリニクザックを背負つて停車場へ出かけるわけでして、そこでどこまで切符を買つてこいということになるのです。そのお二人から山を教わりはじめたころは、まだリニクザックというものも登山靴もなかった。武田先生が、外国から持ち帰られたリニクザックを借りて生地屋にもつていて作つたというわけです。木暮さんは、あるときは浴衣をきて草鞋をはいてやつてくるという調子で、登山靴をはいてくるのは外国帰りの武田先生だけでした。

田部さんはそのころ南日重治と申しておりましたから、いまでも南日君とよんだ方が適切なような気がしないでもありません。その田部さんと木暮さんと、富士をめぐると山を歩くと出かけたことがあった。富士宮から入つて毛無山にのぼつたのですが、私と木暮さんが尾根通しに登つたのに、田部君の姿がみえなくなつてしまつた。私が心配すると、木暮さんは「田部君はいつもこうなんだ。多分沢を登つているのだらう」と平気な顔をしています。はたして頂上へ着くと、田部さんはちやんといるので感心したことがあります。そのあと雨ヶ岳へと歩いて本栖湖の南岸へと小径をたどつた。夜おそくなつて小田原提灯をつけて歩いたので、精進湖で道に迷つてしまひ、美しい娘さんに助けられた。これは『山岳』に「私の登山」と題して書いたことがありますが、略しますが、「あなた方、山に馴れない人はさぞお困りでしょう」と美人に言われて、われわれはギャフンとまいってしまつた。

それから武田さん、木暮さんと三ツ峠を歩きに行ったことがあります。猿橋の本質宿に泊つたところ、女が入つてきて、わたしは売られていく身なので助けてほしいと懇願され、さめざめと泣かれてしまつた。助けるには身代金を出してやらなくてはならないので困りました。お前、うまく断つてくれなんて、面倒くさい役はどうも私にまわつてくるのであります。

武田先生と歩くといつも笑い話がたえませんでした。あるとき、武田さんをお婿さんにくれという料理屋のおかみさんがあらわれた。こんなに蘭切れのいい江戸っ子ははじめてだつてわけの娘の婿にほしいというのです。それはいかんといつて断わるのにだいぶ骨がかりました。

武田さんがおかくれになつて、田部さん、鳥山さんが亡くなつて、私としては非常に愛惜にたえない次第ですが、お三方からいろいろのご教示をいただいたおかげで、医者世話にもなつたかも知らずに丈夫に山登りをつづけてまいりました。大正十一年四月、武田、木暮両先輩と阿能川岳にのぼり、また赤谷川を遡行したり、また大正十五年、野口末延、吉田久兵衛両君と蓬峠から三国峠までの初縦走をなしたのも、そして今日まで幸い命をおとさずにこれたのも先輩からのご教示によるものと感謝している次第であります。木暮さんはすでに亡く、日本山岳会の発起人の武田さんも亡くなつて今度は私の番じゃないかとおもつたのですが、まだちょっと死なないうです。九十に近いとこんなことがおこるかわかりませんが、まだ山登りはつづけております。去年、六義園の有志閑談会で武田先生にお会いしました時、先生、ちよつと足をひきますね、と言つたらおこられてしまつた。何ともないんだと知られて恐縮しましたが、人は足からまいっていくとおもいます。山の上りはいいが下りは石につまづく、それがいくらか心の悩みですけれど、山に登ることは健康にたいへんいいものです。人間、衣食住が足りたら山にのぼることが肝要だとおもいます。金の財産なんてなんにもならない。健康こそ第一の財産なんです。私はそれを主張しているのですが、諸君も山に登ることが最良の健康法だといふことを心得て、私らとおなじようにこたれなようにお願いいたします。

お三方も私の考えたところによる、と、まだお亡くなりになる方ではないと思つてゐるのですが、追悼会をやらなければならなくなつたことを、たいへん残念におもいます。

藤島敏男氏講演

今日は私よりも先輩の方々が多くいらっしゃることで、私がお話しすることもないのですが、武田さんとはかなり長いおつきあいをさせていただきました関係で、少し追悼の言葉をさせていただきます。

武田さんは、われわれの日本山岳会の創立発起人七人のなかで、山川黙氏没後たどりの生存者であり、名実ともに最長老でありまして、その創立者が六十七年目まで現存されたという例は、世界中どこかの会をさがしてもないことであらうとおもいます。これは武田さんが非常に若いときから活躍されたことの証拠になるとおもいます。

武田さんと私の縁は大正八年にはじまるとあります。そのころ戸沢英一君と丹沢へ行きまして『山岳』に記事を書かせてみた。すると木暮さんから武田さんが君たちの話をききたがついていふということ伺ひまして富士見町のお宅へおそろる上がつたのが最初であります。それ以来しばしばお目にかまつて参りましたが、一緒に山へ行かう行つたときは、大正九年に木暮、武田両先輩の驥尾に付して利根川、奥のほうへ行つたときであります。武田さんは湯ノ小屋のオヤジが強慾なのに腹を

立てておられて途中から帰られたのですが、そのときで想い出しますのは、一室で蚊帳をつつて三人で寝たとき、武田さんが寝たままで蚊帳の天井をけつとばせるかと言われて、三人並んで大いに足をあげて、けつとばしくらべをしたんです。木暮さんも私もあまり足が長くなってとどかないのですが、武田さんは楽々と天井にとどくのであります。そこで君たちはどうしてこんなことができないのかとやりこめられたのを覚えていて、それから野天風呂が非常に熱かったということがありますが、武田さんは「藤島君は風呂に入れないで裸になって川原でた湯のまわりをまわっていた」という伝説をこしらえまして、私はいへん迷惑したんです。

とにかくそういう辛辣というか皮肉と言いますか、そういうことでは山岳会の古い先輩のなかでは、われわれがオヤビカと呼んでいた梅沢親光さんと武田さんは双壁でありまして、梅沢さんもずっと長くいらして、梅沢さんは非常に愉快な会話をきくことができたろうとおもうんです。

大正十一年秋、二人きりで山に登ったことがあります。それは樋子湯から中山峠をこえて洪温泉へ行ったのですが、もう上の方は雪があまりしてかなり寒いときでした。そのころ武田さんも私も煙草を吸いませんで、十分のマッチをもっていないだったのであります。峠の頂上でいよいよ暗くなつて小田原提灯をつけようとしたところ、風のなかでなにかつかなく、マッチの棒が最後の一本になり、これがつかなかったらどうなりますかねと言ったら、どうにか燃えさ、と言われた。たまたまその一本で火がついてどうにか下りたおぼえがあります。

そのほか春の白砂山へ行くとか鬼怒川の奥へ行くとかいろいろいるところへ

お供したことがあります。遙かな昔ではあります。懐しい思い出となっております。戦後は二回ほど、霧ヶ峰へ秋と冬のスキーをお供しました。車の山の頂上でスキーをお供するとき、武田さんのスキーが故障したので、寒い風のなかで七十すぎた武田さんは悠々と直しておられました。こちらは待っているのがつらくて早くすべりたいのですが、武田さんは「君、もう少したつと直るよ」と言われる。体がよほど丈夫であつたとおもいます。

武田さんはさきほど申しましたように、痛烈な、辛辣な方で、お話を伺っているとなんともいえなくおもしろいのですが、晩年は自分の納得できないようなミステイクにたいして、行ききよたことを書かれたり話されたことをおぼえています。その段になると私は一向とりあわないことが二、三度あったのですが、これは科学者であつた点からやむを得ないことであろうと、今は感じておきます。

八十九歳という高齢で、近年まであれほどお丈夫で長く病床に臥されることもなく亡くなられたということは、ご本人にとつてもやむをえないことでもあります。ご遺族はもう少し長生きされることを願われたでしょうが、いづれにいたしましてもふたたびあの歯切ったのいい快弁をきくことがなくなつたことを、私は非常に残念におもいます。私の山の先生は、木暮さんと武田さんだともっていましたが、そのお二人とも亡くなつて、ときどき淋しい感じをまねがれないのであります。田部さんと一緒に山へ行ったことはなく、山岳会がよくお目にかかりました。「山と高原」という本を出されるときに、一度わざわざ牛込の私の家にこられて、君の写真を借してくれといわれ、お貸ししたことがあります。こんなおつきあいでしたが、あの枯淡

の味のある田部さんも晩年は健康がすぐれず、お目にかかる機会が少なくて残念におもいます。

鳥山さんは虎ノ門時代の会計をすっかり引きうけておられました。実は鳥山さんが銀行につとめられていたとは知らず、さきほどの松本さんのお話ではじめて知ったくらいです。当時は山岳会ではこの方はどの学校の出身でなんの職業か、一切知らないでむむむとが多かつたのです。たかへん威勢のいい方でした。松方君とか私なんかこういうことをやろうというをやつてしまつたのですが、会計という重要な仕事を受けもたれて、ある場合には昔の先輩は自腹をきつてもつじつまをあわせることをされたんじゃないかという気がするんであります。

茶谷東海氏講演

祥会における山のおつきあいをとおして田部重治先生についてお話ししたいとおもいます。

海軍計理学校に祥会という、海軍でただ一つの山の会がありまして、いまだというワンダーフォーゲルのようなものでしたが、それは田部先生が作つたものです。当時の教官がみな山をみとめてくれないうので、先生が一人で校長にかけあつたといふことであります。「あなた方海軍の軍人はみな愛國心がつよい。しかしその愛國心は抽象的な観念的なもので、日本の国土を知らない人が多い。国土を知ろうとおもえば、その十分の七を占める山に登らなければわからない」という論法で校長を説得しまして、大正三年に作られたそうです。

私は大正十年に計理学校に入りまして、当時、田部先生は英語と論理学と心理学の教官でした。最初の英語の時間、ラフカディオ・ハーンの講義でしたが、十分ほどやりましたところ、バ

タンと本をとじて先生は「山はいいですね」と言われた。それまでは眼玉がギョロツとしてちつとも愛想のない顔でしたが、半分ほど口をあけてニタツと笑われたのです。それから生徒も気分が楽になりました。そのあと一時間ほど上高地、徳本峠、槍、乗鞍という山々や、喜作や嘉門治の話をとめどもなくしていただきました。その静かな口調はよく記憶に残っております。

その翌日、私は祥会に入会したのですが、その翌年、はじめて田部先生について徳本峠、霞沢岳にのぼり、乗鞍岳にまわりました。そのつぎの年は燕岳から喜作新道をおつて槍から上高地へ下りました。この年、喜作が死にまゝ張るのですが、先生はなかなかとりあわなかつたことをおぼえています。

もう一つ、先生のお言葉でおもしろいのは、徳本峠の頂上で英国人らしい夫婦に出会しまして、私はあれがウェストン夫妻だなんてことを言いました。そりやあ、ダメだ、君は何も知らんよ、ウェストンが最後に上高地にきたのは大正二年だ、とおっしゃられました。それから当時の話をされて、ウェストン夫妻が清水屋にきたとき、高村光太郎がまだミスであつた智恵子と落ちあつておいた。ウェストン夫人は二人を、よくお似合いですとからかつたなどと聞かされてきました。先生から少し色っぽい話をきいた最初でありました。

そんなことから毎年、山へ登るようになったのですが、それから十数年たちまして、私は教官として計理学校にもどつてまいりました。教官だから少しは自由がきくことと先生に相談しまして、祥会ではじめて北アルプス縦走を企てました。鳥帽子から槍に出て西穂高まで歩きまわりました。それを終えましてから、夏山ばかりじゃつまら

ない、岩登りをしたいと先生に申しましたところ、大きな目をぐるぐると向けまして、それだから君はうけないんだ、日本の若い人はすぐ岩登りをしたがるけれど、岩登りは英国に生まれが発達したものだ、あそこには高い山がない、英国人は仕方なしに岩登りをしないで満足してるんで、日本のように高い山のあるところで、すぐ岩登りをやろうとは本筋ではないといわれました。それも先生の腹のなかを探してみますと、お前にはむりだからということだったとおもいます。

先生は生徒にこんな訓辭をされたことがあります。海軍の生徒は海軍の軍人ではない、しかし法律上は海軍の軍人に準ずるということになっている。したがって諸君の死に場所があるはずだ。山で死んだら諸君は大死といわれるであろうから、それをよく注意せよ。こんなふうには教えさうとされました。

終戦によって海軍がなくなり、祥会も自発的に解散したので、昭和十七年になって祥会を復活することになり、先生に名誉会長になっていただきささやかな贈物をさしあげました。先生から、いまだ昔の教師を呼ぶなといめずらしいことだ、これは海軍のいい一面だとほめていただきました。われわれは先生もお世辞がだいぶうまくなつたなあといつて笑つたものでした。われわれの会合にはいつも出席して下さつてお話しくださったのです。それもそのころは高い山の話ではなく、低い山の歴史、人情、風俗方言などに興味をもつておられたようです。お酒がまわつてくると、歌をうたつてこの意味がわかるかといわれます。これがたつた一つの色っぽい話であつたかもしれません。尾崎紅葉が佐渡に滞在したときの話で、彼が若者の小菊におくつた歌だそうです。「こいちゃ

「こいちゃと二度だまされた、またもこいちゃでだますのか」小菊の三味線に紅葉が書きこんでいるようですが、先生によれば、こいちゃとは行きます、参りますとの意味で、紅葉が女にだまされた話をこやかにされていまして、先生の元氣なお話を伺った最後のことだったようにおもいます。今年は先生の八十八歳のお祝いをしようと、われわれ梓会の子たちは盛大な会を計画しておりまして、日本山岳会の方、先生と親しくされておられた方をお招きいたしたく考えておりましたが、果たせずまことに残念であります。来年は雲取山にまいるまして、先生のレリーフに對面したいとおもっております。

(記録・近藤信行)

『第六回国際生気象学会』

に出席して 中島道郎

わが一九七〇年エベレスト登山隊医療班の学術研究成果は「報告書第二部・学術報告」に詳しく述べており、また第二十四回日本体育医学学会、第十回日本生気象学会などに発表して参りましたが、世界に向かってわれわれの研究成果を問う努力はまだしていませんでした。日本の登山隊が世界に魅かれてエベレスト南麓に挑んだことは、もはや世界衆知の事実ですが、学術的成果についても一応発表しておかねばならぬと考え、去る九月四日よりオランダで催された、第六回国際生気象学会議に出席した次第です。

「生気象学」(Biometeorology)とは耳新しい言葉かも知れませんが、生物と環境条件との関係を論ずる学問分野で動植物学、医学、農学と気象学、地理学、地球物理学、工学などとの接点に位置し、生物と自然、あるいは人工的な環境の変化、たとえば大気や海洋の

文化功労者に今西錦司氏

今西錦司氏(会員番号一一一七番)は文化の日の去る十一月三日文化功労者に選ばれた。

秋の叙勲

伊達篤郎氏(会員番号五一五四番)は去る十一月三日藍綬褒章を授与された。

小島六郎氏(会員番号五三〇三番)は去る十一月三日勲四等瑞宝章を授与された。

科会にわかれての討議という風に進められました。この分科会は十七のグループにわかれており、私が参加しましたのは「高所の、人と動物におよぼす影響」研究グループです。アメリカ、イギリス、ドイツ、スイスそして日本から集まった、山の好きな学者達で、少数でしたが気持のよいグループでした。私の講演は、「エベレストにおけるクライマーの呼吸循環機能について」と題し、九月五日午後二時から約三十分に行わってしゃべりました。座長はチューリッヒのワイエ博士でした。この道の大家です。私の講演に対し、これに示した気圧は実測値か?という質問が出ました。質問者、ムーア教授(地球物理学・元アスカ大学長)は前日に、次に述べるような論旨の発表をした人です。

「高度と気圧の関係は、地球の緯度と季節によって異なることに留意しないといけない。国際慣用航空用高度算定計算式は北緯四五度における、春の平均気圧を七六〇mmHgとしたもので、ヒマラヤのように緯度の低い地域の山では同じ高度において気圧は高く、アラスカなど高緯度の山地では気圧は低く現われる。夏は気圧が高く、冬は気圧が低い。つまり、例えば夏のヒマラヤでは、真の高度は、高度計の読みよりは二、三百m高い筈である。」彼の理論については、また別の機会に紹介したいと思いますが、これからはヒマラヤに登る人たちはこの高度計の読みと真の高度とが違ふということについては特に留意する必要があるでしょう。また生理学的な調査をする時には、単に高度学的地点とせずに、気圧何mmHg地点という風に傍記しないと学問的とはいえないということになるわけです。

私の話のほか、コロラド大学ワイイル博士による「人間と動物の、平地と高

地における肺換気・血流比の分布について」と題する、極めて専門的な、*Wash*を用いた実験に関する報告、ワイエ博士の「高所と薬物毒性」、インドのシンド博士による「高所における血液の凝固性」(ワイエ博士代読)、アメリカ・NIHのアルトランド博士による「寒冷に(高所でなく)順化したネズミとしないネズミの低酸素に対する抵抗性」というちょっと奇妙な報告、そして最後には西ベルリンの開業医アルブレヒト博士による「高所未順化人間の、標高五三〇〇m到達までの代謝と労働能力の変化」という、一九七一年アコンカグアでの研究報告などがありました。このアルブレヒト博士の報告はまだ現役のクライマーであり(もう一年ですが)、臨床医であるという点において私と共通点を持ち、大いに気が合ったので、ヨーロッパの帰途、予定を変更してわざわざ西ベルリンに彼を訪ねました。たまたま私の誕生日にあたっていたので、大歓迎をしてくれましたが、私の持参したスライド一枚一枚について、同意見だとか、ここは一寸違ふとか、討論が尽きず、全く愉快な一刻を過ごしました。

妻子三人揃ってアコンカグアの頂上を踏んでおり、開業の片手間に自分で資金を集め、遠征隊を組織し、医学研究器材を持ち上げ、立派な学問的業績を挙げた上に自分で登頂までやってのけているわけ、実行力までやぐく頭の下がっている感じがいたしました。さて以上オランダでの第六回国際生気象学会議(一九七二・九・四・九・九)の討議に参加した時の模様を簡単に報告いたします。この会議は簡単に報告したり、松方さんはじめエベレスト登山隊員各位、本会常務理事各位ならびに医療委員会委員各位の心暖まるご配慮を賜りました。紙面を借りて厚くお礼申し上げます。

『福岡支部、東九州支部 合同懇談会のこと』

吉沢一郎

福岡の新員君から今度機会があったら是非来てくれと言われていたし、私も暫らく九州にはご無沙汰していたので、電話がかかって来たらその場で承知してしました。

十一月四日、羽田から福岡までは直航で、一時間と一寸だが、出発が遅れたので、出迎えて下さった末松支部長その他の方々にはえらい迷惑をかけてしまった。

例によって大宰府の天神様にお詣りしてから一路南下、久大本線の豊後中村から九重町に属する鳴子川の溪谷(九酔溪)に入る。紅葉は最高潮、飯田高原に出ると九重の山々が連亘、やがて筋筋の近くにある新日鉄の保養所に着いた。もう東九州支部の野口支部長さんとも来ておられた。

風呂に入ってから両支部合同のささやかなしかし和やかな懇談会に入る。私は一時間ばかり日本の登山界や日本山岳会の近況などについてとりよめの話をしてきた。九州にもいろいろ問題があるらしいが、山の好きな人達が一日も早く仲の良いグループになって欲しいものだと思ふ。

夕食が済んでから有志が沢山私の部屋に集まってきて夜おそくまで山を語り合っていた。日山協の研究会でもHKK会議でも、本書はいつもこの快談にあるらしい。

翌五日は長者原の近くにある高尾さんの立派な小屋に案内され、それから日田市へ向かった。ここでHKKの先輩矢野さんに会い昼食を共にしてから福岡へ戻る。東京ホテルでの懇談会は又賑やかで末松さん、柳原さん、緒方さんその他の方々の顔も見えた。

平家物語に「手越を過ぎて行けば、北に遠ざかりて雪白き山あり、問へば甲斐の白峰といふて書いてある。この手越とは現在の静岡市の西端である。手越の宿は東鑑などにてもでてる有名な宿場であるが、どのあたりが中心地であったかは判らない。平家物語にでてる手越をすぎ、府中（現在の静岡市の中心地）へ向かう道すがら、北を見て白い峰が見えるのは、安倍川の右岸に來ない、徳願寺のある山にさざぎられて見えない。川岸で見えるのは、聖岳、赤石岳、荒川岳まで、甲斐の白峰山は赤石山脈にさざぎられて見えない。この有名な文章のひとつは、聖岳、赤石岳、荒川岳を見て甲斐の国との境にある雪白き山々という意味で、白峰が見えるといったものであろう。

南アルプスは静岡（駿河）山梨（甲斐）長野（信濃）の三県（国）にまたがっている。長野県の諏訪湖南岸の守屋市から南下して、静岡県の京丸牡丹の近くの高塚山まで、平均四〇kmの市で南北に二二〇kmに連なっている。この赤石山系に属する南アルプスの中には、十七個所も水河遺跡のカルドとをもつ、三千m以上の高山が十二座、二五〇〇m以上の山は何と、五六座もある。赤石山系は、赤石岳を主峯とする赤石山脈、甲斐駒ヶ岳を主峯とする駒ヶ岳山脈、北岳を主峯とする白峰山脈、一八八九mの鬼面山を最高とする林業の盛んな伊那山脈からなっている。

この赤石山系は弓なりに曲がった日本列島のほぼ中心地帯で三角形に太平洋に拡がっている。ちょうど、ウーシと力んで、両手で日本列島を弓なりに曲がっているのが南アルプスである。この南アルプスの駒ヶ岳山脈に沿って、静岡県の富士川から新潟県の糸魚川を結んだ線で日本列島は、東西に分断された地質になっている。大昔は、日本海

の水が、糸魚川や富士川に沿って太平洋に流れ込んでいた。この二万年位前に出来た大きな割目がフォッサ・マグナと呼ばれる大地溝帯なのである。現在ではこの大きな溝は埋まって、糸魚川となり、富士川となつて流れている。このフォッサ・マグナに沿った南アルプスは日本列島を東西の地質にわけているが、日本の歴史も面白いことにこの地形から大きな影響を受けている。この地判る。四、五世紀頃、平和な日本であったが、富と力により部族集団の軋轢が始まり、六、七世紀には部族集団から脱皮して、日本国家が誕生したといわれている。この頃の大和朝廷の勢力圏内は、南アルプスにはばまれて、せいぜいその西側辺りまでであった。この山脈から東側の日本は、『東夷』と呼ばれる野蛮地方と書かれ

南アルプスと人間《上》

山本朋三郎

である。本来は野蛮地方でなく、有力な部族がいて大和朝廷の統治が余りおよんでいなかったのである。考古学的にも日本の一時代を区分する目安にされる、銅鐸の分布も、大井川を境にしてだんぜん西に多く、分布図を見るとこのあたりで日本を東西にわけている。大昔には、高い山や原始林は人間の往来に大きな障壁となつていたのである。考古学的に東西に日本をわける役目を果たしていた南アルプスは、東進しようとする文化をはばみ、壁に向けられた放水が四散するように南アルプスに沿って南北に人間の往来が起つた。八世紀の奈良時代では、フォッサ・マグナの地帯を含む南アルプスをめぐる国々は、中国と呼ばれ、日本海と太平洋を結ぶ南北の地帯として

区分され、現在でも中部地方との区分名称がある。言語学的に見ても、南アルプスを軸とした南と北の言葉の類似性は、おどろくほど高い。静岡県のおはこやうにいわれているハズラ言葉Vは、長野や山梨の方言として使われている。西側地域の、名古屋地方のハキヤモV方言や関東および北の方言は、南アルプスをめぐる長野、山梨、静岡地方にはあまり影響していないようである。人間の使う言葉や道具や宗教なども、やはり人間の行き来の多少で影響され易い。南アルプスの山中から流れ出る川は、昔から人類の往来の最も重要な道として使用された。南アルプスをめぐる長野、山梨、静岡三県の方言の類似性はそれだけ人間の往来の多かった事の証明である。道らしき道の無い大

昔では河川が唯一の交通手段である。諏訪湖から流れ出る天竜川、山梨、静岡、長野の山々から流れ出る雨水をあつめて流れる大井川、白峰の山深く残雪のとけ水をあつめて駿河湾にそそぐ富士川。みなそうである。登呂人達が美しく飾っていたヒスイの珠も、日本海側の糸魚川から松本盆地を経て、天竜川を下つてもたらされたものであろう。芝川の小塚遺跡の古代人が使っていた黒曜石は、静岡県下では産出されないもので、これも富士川を下り、山梨、長野方面から招来されたものであろう。時代は下り、山国の人たちの生活必需品としての、相良塩、久能塩の塩みちが、険しい山路をひらき急流を遡行し、天竜川、富士川沿いに開かれて行った。南アルプス北方の信濃、甲斐地方の方言が、山の幸

とともに駿河地方に下り、駿河の海の幸を運ぶ人間の生活様式が山国の人たちの間へ、知らず知らずのうちに影響し合つて行ったであらう。秋葉道、身延道と呼ばれた街道は、つい最近まで三県のそれぞれの地域の人たちにあって、重要な文化交流の道でもあった。南アルプスの開発は、文字に書残されたものは、余り昔には遡れない。しかしながら、縄文土器や石器の発掘、発見もされており、大昔から人間は川に沿った小盆地、平坦地にしたいに定着して、焼畑農耕へと進んでいった。考古学的根拠があちこちに出土していることも判る。大和朝廷の確立期をすぎ、日本国として律令体制の成熟期（九一〇世紀）をへて、荘園制度の崩壊期には南アルプスの山麓に、ほぼ現在の村落の原型が出来上がっていたのである。さらに山奥の隠田の開拓や鉾山の発見、採掘で、多くの人達が南アルプスの山奥へと定住するようになっていった。荘園制度の崩壊は南北朝の争乱（一三四〇年代）でさらに拍車をかけられた。

南北朝の争乱は、土地所有に基因する。日本民族を二分する大きな争いでもあり、土地の占有の型式を一步近代的所有権へと発達さす第一歩でもあった。争乱に敗れた南朝方の皇族やそれを支持した貴族や、護衛の任に当たった野武士（農民から浮かび上がった武力者たち）たちが、南アルプスの各地に隠れ住み山奥深く、追手をさけねばならなかった。京丸、奈良田、鹿塩、水窪などには有名である。さらに群雄割拠の戦国時代（一五八〇年代）となる軍用金調達のため、鉾山の開発が盛んになり南アルプスの各地で金、銀、銅の採掘量が飛躍的に増加を見た。このころは村から町から人夫たちが多く連れてこられたことを物語る。（つづく）

もみじ会報告

佐藤テル

いつもお誘いを受けながら猪肉を喰べる会のように思つて怖れをなして一度も参加しなかったが、今回は紅葉見物のハイキングらしいとのことと皆様の仲間に加わった。

十一月四日一時に静岡市役所前に集合した者総勢四十数名、寝袋持参と注意された故か低山ハイカーにしてはみんな荷物が高ばっている。

幸に天気は良好、風は無し、バスにて薬科川にそつて大川村の坂の上近くまで乗り入れ、そより支部会員の車で檜尾の久作山荘へピストン輸送。荷物だけわたのむ健脚班、明日の登山にエネルギーの節約班など各自好きなテンポでゆるやかな山道を登ることおよそ二時間で茶畑の急斜面の宿舎につく。秩父に似た景色である。

きれいに刈り込まれた茶畑の波、古い民家で山菜料理を喰べて、山友連と飲み、語り、そして登るなど四調子揃うことは仲々大変なこと、支部の連中はなんとこの四つをうまく演出しようとする準備をされたように察しられた。

例年通りの「おしるこ」や仕出し屋のプラスチック箱入りの食事も、支部の方々のご苦労をしのんで感謝して一同本家の広間で会食し、松本先輩の感想、成瀬副会長の挨拶について出席者全員の自己紹介など。おひらきになってまた七時である。誰からともなくいりを囲んで先輩、中輩、弱輩の大懇談会が先きに九時頃まで続いた。翌朝記念撮影後ABCの三パーティが北と西にわかれ、われわれ一行二十六名はB班で、石間信夫氏をリーダー

として智者山へ、Cは七ッ峯、Aは山本支部長の案内で福養滝へ。

B班の最年長は八〇六番の野口氏、最年少は五歳の芳野マリちゃん、朗かに歌う、元二期会々員の神田さん等多士済々の賑かさであった。

崩野の東谷山は訪う人もない淋しい寺で、二百年前の建立であるとか。耳の遠い坊さんと話しながら少憩。お賽銭をあげ山岳会の発展を祈る。寺の横から茶畑とわさび畑を上へ上へと登る。

ひどい藪こぎが続く。九百mあたりから東に折れて、天狗岩山と智者山の中間の尾根筋に出てやれ／＼ホッとす。山頂で昼食をとる。穏かな秋の日ざしにりりんの紫が目にしみるように美しい。細い道を一気に下る。

杉林を抜ける頃から歩き易くなる。支部の方がこの山道を態々伐採して下さったとか。このような協力と善意がこの催しを十五回も続けさせる秘密かも知れない。

やがて本川根町の大井川に出る。橋を渡り、千頭駅より四時半の電車にて静岡へ。かくて一日のコースは無事に終わる。

毎度のことながら、この種の会合を支部が主催するのは食事のこと宿舎の部屋割りなどで苦心される。特に往來の看板料理のすき焼か鉄板焼などは欠席者の余り肉の処分や、宿舎の取消料などの無駄な支出を全部支部長や支部におんぶしていたよう、JACの会員ともあるものがそれに對して知らんぷりであった事に私は義憤を感じた。非常識というよりもむしろモラルの低さに驚き、今後は少くとも一週間前に出席の返事を取消すのでなければ支部に金一封を送るべきであり、山岳会員はこれをすべての集会の習慣とし

たいものでありたい。

大勢の出席者でも流石に、飲んで乱れる方がなかったのは偉であった。しかし起床、朝食など定められた時間を守らぬ人、みかんの皮など道路に捨てた無神経な人もあり、ボーイスカウトに参加し訓練を受けさせた役方がおられたのは真に遺憾というべきか。

終わりに山本支部長を初め支部の皆様に厚くお礼を申し上げる。

（参加者） 成瀬岩雄 西丸震哉 麻生武治 内藤正広 名見野達男 水野公男 松本熊次郎 渡辺弥生 佐藤テ

ル 山本朋三郎 岩永安雄 山崎金次郎 松本善二 佐藤佳年 近藤信行

望月達夫 大田敬 小原勝郎 小原晴

子 牧野衛 小林重一 斎藤桂 芳野

菊子 朝井一男 岩永信雄 川端信治

鶴見敏彦 山口亮 勝見幸雄 大石惇

石間信夫 野口末延 小林伸吉 瀧浪

善一 沼倉寛二郎 中保 山田哲郎

（ほか会員外八名）

鳥海山懇親山行報告

深田志げ子

年長組と一括される三人だが、御存知、佐藤さん細川さんは海外遠征隊長をされたベテランである。その中にみそかつの私を入れて頂き、若い松永親子、須田さんに、鳥海をわが庭のように知悉される地元の林氏が案内役の七人のパーティが「四時までに戻ってね」と言われてジープで駒止山荘を出立。鈴立からいよいよ登山道に入る。先登は佐藤さん、ステッキを手に颯爽たる足取り、飛び切り年少の新平君もドンドン歩く。登るにつれて開ける景観を林さんは委しく説明して下さい。賽の河原近くまで来ると、昨夜の流

星騒ぎの寝不足がたたって風邪気味の平平君が疲れたようなので若い二人に委せて、私達はひと足先にという事になり、愛宕坂にかかる頃は四人パーティとなった。心許ない足取りの私のリュックはいつか林さんが背負って下さる。御浜神社の鳥居をくぐり、小屋の傍で小休止。甘いものを口に入れ、鳥海湖を眼下に、鍋森、扇子森と指呼して教わる。昨日ほどの快晴ではないが眺望は利き、急坂に息を弾ませる汗ばむ程である。八丁坂、千蛇谷と進んで、いよいよ最後の登りにかかる前に昼食をとった。休む毎に、佐藤さんが削いて下さるリンゴや梨の美味しかったこと！

十二時半、頂上の大物忌神社の鳥居をくぐる。閉ざれている社殿の扉を林さんが開けて下さり、婦人懇談会を代表して、佐藤さんが浄財を賽され、一同参拝することが出来た。すぐ後ろに聳える新山を見上げる。こごしい岩峰である。佐藤さんは意欲充分とお見受する。細川さんは謙虚な御心構えのようだが、一番非力な私がこの機を逃してはと張切って「私の実力で登れそうだったら連れて行って下さい」とお願いした。林さんは「特別にむずかしいことはありません」と承知して下さい、秋山の新山に踏出した。先登は終始佐藤さん、細川さんも「三点確保」など口にされながら確かな足取り。私も必死に手と足を動かした。「自分の靴を信用しろ」とよく深田に言われたのを思い浮かべた。

やっと頂上に立てた時の嬉しさ、林さんはじめ同行者のおかげさまとしみじみあがたかった。三百六十度の眺望、月山がはっきりと優美に浮かんで

いる。――
戻りは胎内くぐりのような所もあり、神社の裏に戻って来た。ここから別のコースを採るにはもう時間が遅す

きたので、もとの道を引返した。往きに昼食をした辺で休んでいると單身松永さんが登って来た。新平君は須田さんと小浜の小屋に待つていつを持って、私たちの差出すリンゴ一つを持って、瞬か間に後姿は小さくなった。私達も帰路を急いだ。御浜神社の小屋が近づいた頃、先刻の松永さんに追付かれ追越される。若さだなあーと一同羨むことしきり。ヤッホーの呼声のあと、小屋から待ちかねて須田さんがとび出し、て来られて、予定の時刻を過ぎているから休まず出立と激励され、トラック便乗に間に合うようゴロゴロ石の道をドンドン歩く。新平君はオンブされたり歩いたり。見晴し台まで来てひと息つく。今日一日秋天にかがやいた太陽も日本海に沈もうとして、金波銀波の美しさは雄大である。昨日登頂された小原さんの話で聞いていたコンクリートのついた石坂に差しかかった。林さんはトラックを止めるため一目散に駆け下りて行かれた。折角の自然石を配した段々を全部コンクリートでかためた坂道でところどころ石が頭を出している。何とおおきな道だ。地元の島中氏などにひとこと相談もなく遊佐町でやったものだという。冬になって凍ったら危いだろう等とベテランたちの批判はきびしい。新平君を先頭にやつと自動車道に出た。五時半をまわっていて作業員のトラックはもう見当らなかつた。最悪の場合でも二時間歩けばいいんだと負け惜しみを言いつつ暮れかかった道を大平小屋あたりまで来ると、地獄で仏、迎える自動車が来た。遅い年長組を案じた山口さん達が、三菱建設の現場の自動車を頼んで迎えに来られたのだ。心配をかけて申し訳なかった。心から皆さんにお詫びしたりお礼を言ったりして、あたたかい夕食の待っている山荘に帰った。昨夜にくらべて、小倉 岡部、小松のお三

方の欠けたのは寂しかったが、一日行動を共にした親しさが一同を寛ろがせて、和やかに最後の夜を惜しんだ。翌朝も晴天に恵まれた。ジープで先発する若手組を見送り、年長組はあとの掃除に精を出した。山荘の持主の小松氏が車で迎えに来られ、二晩ぐ厄介になった駒止山荘に別れた。小松氏は感謝で一杯の私差を岡部家まで送って下さった。先着の一行と合流、玄関前で全員記念撮影をして、楽しい三日の旅のピリオドを打った。須田さん、山口さん、富田さん、清水さん、若手幹事の方々のご配慮と、岡部さん、小松さん、林さん、菅原さんと現地の方々のご厚意によって、まさに最高の山旅が果たされたことが、新参の会員としてことに感銘深かった。

『山岳』第六十六年の件

刊行が遅れご迷惑をおかけしましたが、十一月十五日に発送いたしましたのでお知らせいたします。恐縮ながら次の点を補足、訂正させていただきます。

一、一〇八頁に続くパノラマ写真の説明「チューレン・ヒマール中央峰頂上からの展望（東面）」

二、二二四頁下段「写真四頁三、訂正

一四九頁下段後から六行目

ユウコー

二〇五頁上段四行目

十二月一―月二―月

本号では、従来掲載を続けてきた海外登山年表を種々の都合により中断させていただきます。目下様式、内容等を検討中ですが、次号ではそれに基いて様式等を若干改め、復活させる予定です。ご了承ください。（中島 寛）

図書紹介



宮下啓三画

ヘディン伝

金子民雄著

十九世紀末から今世紀前半にかけて、アジア内陸の広大な空白地帯を埋めて行ったヘディンの偉業を知らぬ者はなからう。しかしその晩年については我が国ではほとんど知られていない。これはナンセン、アムンゼンなど比べて大きな相違でありこの部分（「ペーリリン使節の失敗」以下五章）が、本書の大きな特色をなしている。

前半、「ヘディン自然の探究者」以下の六章は、比較的知られている探険家としてのヘディンの業績を語る。「生と死の彼方へ」では、彼の第一回探険、タクラマカン縦断の悲惨な記録（いわゆる「地上最悪の旅」）が記され、「拒まれたラッサへの道」では、彼のあれほど望んでいた聖都ラッサへの到達が、当時の複雑な国際関係と陰謀とによって失敗に終わるプロセスを描き出す。「トランス・ヒマラヤ」発見された巨大山脈——は、彼が第三回探険（一九〇六—八）において、五千mを越す多くの峠を南から北へ、北から南へと越して得た結論（「ヒマラヤの向うの」山脈、すなわちトランス・ヒマラヤの存在）が、彼自身名誉会員になっていた英国地理学会で否定されるという悲劇的結末にいたるまで、悉しく語られ

る。この会合にはわれわれにも親しい名前、フレッシニフィード、ロングスタッフ、コンウェイなども列席して意見を述べている。前半最後の章、「死の町ウルムチの幽囚」は、「さまよえる湖（ロプノール）」の実態を確めなく、大規模な「西北科学考察団」のリーダーに祭り上げられ、ついに一九三五年にはソ連、イギリス、南京政府、新疆地方政権（督弁、盛世才）などの複雑なからみ合いの犠牲となって暗殺と陰謀のうずまきウルムチに軟禁され、辛うじて一著者の推測によれば新興ナチス（ヒトラー）の介入によってここを逃れるまでを極めてリアルに描き出す。後半の五章は、第二次大戦の開戦前夜から戦中、戦後を通じての彼の悲劇的晩年を描く。「西北科学考察団」の莫大な借財を返済するため、老軀を駆けてドイツを講演して歩くヘディン、また奇妙な運命のいたずらによってヒトラーから好意をもたれ（死の町ウルムチ）以来、また親友の姻戚関係からゲーリングと親しくなるヘディン、さらにまたその発言権を利用して祖国ソルウェーの反ナチ運動者の助命のため奔走するヘディン、そして戦時中ナチスから好遇された故に、避つては第一次大戦時分から親密と見られた故の、晩年の彼の不遇について物語る。また散見する彼の「失意」についての記述は全く新しいものである、あの大探険家の知られざる一面についてメスを入れたものと言えよう。さらにまた世界的名士としての半世紀の歴史の中で、彼があつた人々について語るヘディン（三十年前のパール・バックのすしめにするものという、彼の八十五歳の時に出版された「偉人と王侯」、多くの知己を失い「私は本当にひとりぼっちになってしまった。私の友人達はみな亡くなってしまいました。いま唯一

の生きている友人といえば、国王だけです」と述べたヘディン……。そして二十年間抱いていた彼のテーマは最後の著作「アジアにおける私の犬たち」となって出版され、彼がこれを手にして僅かに数日後、この巨人は八十七歳で世を去った（晩年と死）。

些細な点について少々注文をつけられ、我が国慣用のペテルスブルグが全部ペテスブルグになっていた、トリローニ・ソルダースとあるべきところがトレラウニ・サウナードスとなつていたりするの訂正さるべきである。藤原督の事故死（一六三頁）は、二二六事件における斎藤内府の殺害とでもすべきであろう。また挿入された地図はいずれも少々小さすぎるように思われる。

著者はスウェーデンで勉強した人らしく、スウェーデン語の原書を駆使し、不明な点はスウェーデン、ドイツの友人たちに問合せて明らかにするなど深い配慮を払って本書を完成した。どのページにも著者がヘディンに注いだ愛惜の情が滲み出ている。巻末に付された注、文献抄（邦訳されたものについても、重要なものはほとんど網羅されている）、略年表を見ても著者が本書に注いだ熱意が察せられる。またところどころに挿入されたヘディン自筆のスケッチも眺めて楽しい。近來珍しく味読した書物として推薦する次第である。（板倉勝正）

昭和四十七年八月 新人物往来社刊
B6判 本文二六〇頁 定価九五〇円

極点往復の一評価

一九七二年のアルバイン・ジャナールを拾い読みしているうちに、書評欄の一隅に「日本南極観測隊……」の字が目に入った。A・Jのこの号の本文

欄には会員、高橋照、山本良三両君の「マナスル西壁——一九七一年」と「チエレン・ヒマール初登頂」とが、それぞれ写真入りで掲載されているのだから、書評欄の片隅の記事くらいに悦に入るほどのことはないかも知れないしかし、その一節、短いけれどもちょっと嬉しがらせてくれるのである。「アルバイン・クラブでは、遠征報告の類を毎年相当数うけとっているが、この書評欄で採り上げるだけの水準に達しているものや、文学的にすぐれているものは稀である。」と、評者マイケル・ペーカー氏なかなか厳しいのだが、「しかし……」といつて日本南極観測隊の一九六八—一九九南極点往復記録はその稀にしかないものの一つだと、なかなかの褒めっぷりである。

この記録とは、一九七一年に極地研究センターから村山雅美所長を編者として英文で刊行されたREPORT OF THE JAPANESE TRAVERSE : SYOWA-SOUTH POLE 1968—1969のことであるが、評者は興味を覚えた点一、三を挙げてゐる。たとえば携行食糧のこと、遠征中の生活報告のことなど、とくに後者のなかで述べられている排泄についての巧みな記述とか、「休息は仕事の一部であり、休息が疲労を克服し、次の仕事への精力をよみがえらせる」といった点の強調にも同意を示して、この Behavior Report を a classic of its kind とさへ評している。

なんの気負いもなく、淡々と述べられているこの生活報告が、A・Jに知己を見出したのは、当然かも知れないが、報告書の編者や執筆者には、やはり嬉しいことであろう。（島田 巽）

図書室便り

（昭和47・11）
新刊図書受入報告

- 旺文社寄贈
 - (1) 山崎安治著『登山』 昭和47
 - (2) 山崎安治著『登山』 昭和47
 - (3) 山崎安治著『登山』 昭和47
 - (4) 山崎安治著『登山』 昭和47
 - (5) 山崎安治著『登山』 昭和47
 - (6) 山崎安治著『登山』 昭和47
 - (7) 山崎安治著『登山』 昭和47
 - (8) 山崎安治著『登山』 昭和47
- 日本文芸社寄贈
 - (1) 高橋伸行・石野武著『写真でみる登山入門』 昭和47
 - (2) 高橋伸行・石野武著『写真でみる登山入門』 昭和47
 - (3) 高橋伸行・石野武著『写真でみる登山入門』 昭和47
 - (4) 高橋伸行・石野武著『写真でみる登山入門』 昭和47
 - (5) 高橋伸行・石野武著『写真でみる登山入門』 昭和47
 - (6) 高橋伸行・石野武著『写真でみる登山入門』 昭和47
 - (7) 高橋伸行・石野武著『写真でみる登山入門』 昭和47
 - (8) 高橋伸行・石野武著『写真でみる登山入門』 昭和47
- 新時代社寄贈
 - (1) 勝田茂著『登山生理学』 昭和47
 - (2) 勝田茂著『登山生理学』 昭和47
 - (3) 勝田茂著『登山生理学』 昭和47
 - (4) 勝田茂著『登山生理学』 昭和47
 - (5) 勝田茂著『登山生理学』 昭和47
 - (6) 勝田茂著『登山生理学』 昭和47
 - (7) 勝田茂著『登山生理学』 昭和47
 - (8) 勝田茂著『登山生理学』 昭和47
- セミノフ著・田村俊介訳『はるかなる天山』 昭和47
- 船形連邦御所山開発促進期成同盟会編『船形連邦御所山案内』 昭和47
- (1) 船形連邦御所山案内 昭和47
- (2) 船形連邦御所山案内 昭和47
- (3) 船形連邦御所山案内 昭和47
- (4) 船形連邦御所山案内 昭和47
- (5) 船形連邦御所山案内 昭和47
- (6) 船形連邦御所山案内 昭和47
- (7) 船形連邦御所山案内 昭和47
- (8) 船形連邦御所山案内 昭和47

- (11) 札幌山岳倶楽部『部報』No. 86(47-11)
 (12) 日本自然保護協会『自然保護』No. 118(47-3), No. 119(47-4), No. 120(47-5), No. 121(47-6), No. 122(47-7), No. 123(47-8), No. 124(47-9)
 (13) 低山を歩く会『低山』No. 89(47-11)
 (14) 登歩溪流会『会報』(46-10), (46-12), (47-2), (47-4), (47-7), (47-10)
 (15) 日本山岳協会『登山月報』No. 44(47-11)

- (16) 日本登山協会『山と雪』No. 175(47-11)
 (17) 『雑誌』
 (1) 『アルプ』No. 177(47-11)
 (2) 『地図』Vol. 10, No. 40
 (3) 『山人』No. 306(47-12)
 (4) 『若く雪』No. 28(47-12)
 (5) 『山と溪谷』No. 411(47-12)
 (その他)
 (1) 日本観光文化研究所『AMKAS資料目録アフリカ』
 (新着海外雑誌)
 1. "Alpinismus" 72-10.
 2. "Der Bergsteiger" Jah. 39, Oktober '72.

3. "Chicago Mountaineering Club" Summer '72.
 4. "Mountain" No. 23, September '72.
 5. "Österreichische Alpenzeitung" Jah. 90, Folge 1384, Juli/August '72.
 6. "Panorama of Slovakia" '72-4.

会務報告

昭和47年度除籍者

- 左記の会員は、会費を昭和43・44・45・46・47年の五カ年間滞納のため、定款第十一條の規定により、本会台帳より除籍されました。復活ご希望の方がいらっしゃいましたら、その手続きをとられますようお願い致します。
 四三〇 南川 和義
 四三二 昭和大学山岳部
 四三三 福原 健司
 四三六 東京写真大学短期大学部
 四三八 山岳部
 四六八 小滝 頼介
 四七九 小茶の水女子大学山岳部
 四九一 田中 裕
 四九三 谷口 正彦

- 五二〇 東京外国語大学山岳部
 五二七 塚越 雅則
 五五〇 東京医科歯科大学山岳部
 五八一 立岡 悠
 五六三 大貫 健作
 五七〇 茂野徹太郎
 五七五 宮田 健
 五八二 森田 尚幸
 五九一 丸子 博之
 六一〇 鳴嶋 正吾
 六二五 David Edward Herron
 六二七 石井宇一郎
 六二七 山田 忠
 六二七 岩野 正代
 六二九 都立石神井高校山岳部
 六三〇 OB会
 六三〇 加賀谷勝清
 六三〇 Leonard Robert Kison
 六三六 山口 勝康
 六三七 青田 実
 六三九 恋嶺山岳会
 六四二 川道 武男(北海道)
 六四五 千葉 靖男()
 六四九 伊藤孝次郎(秋田)
 六六六 佐藤 勇(山形)
 六六六 渡辺 佳英(福島)
 六九三 大内 勝男()
 四九〇 平 直衛()
 四九七 高橋 文治()
 五七六 佐々木健臣()
 五七六 遠藤 好一(信濃)
 四二七 東洋紡績興業科工場山岳部()
 四二八 伊藤 宗二()
 四六八 増田 幸雄()
 五八〇 中川 須磨子()
 五八四 中山 峰男()
 五九一 市東 貞雄()
 五九七 市東 貞雄()
 六一四 中山 文男()

明治四十三年七月十八日、扇沢から種池に向かって、扇沢の雪溪を登っていく三人の若い登山者があった。この三人は山岳会創立後に入会した辻本満丸(会員番号二〇)、三枝守博(同三五)と、やや後れて入会した中村清太郎(一五三)で、ガイド遠山兵三郎と人夫三人、見習い名を伴い、中村の手にはスリス製のビッケルをモデルにして試作させた自慢の国産ビッケルに輝いていた。それもその筈、この三人は種池から鹿島槍を往復した後、針木峠まで縦走し、針木から黒部川に下って平を渡り、五色原、薬師、太郎、上の岳、黒部五郎と、当時としては全く大規模な初縦走を計画し意気盛であった。

扇沢の雪溪はやがて尽き、種池平のお花畑に入った。ガイドの兵三郎は、この向こうは黒部に落ちる棒小屋沢であることを自分達は棒小屋乗越と呼んでいると説明した。兵三郎がさらに周囲の山々を説明しているときに、中村清太郎は、お花畑を飛んでいる白い小型の蝶に気がついた。中村は中学時代から蝶が好きで、あちこちと採集して廻り、図鑑などもよく見ていたし、高野鷹蔵とも親しかったが、二、三年前から採集をやめて、この時は捕虫網を持っていなかった。

山と蝶のものがたり

虎の子クモマツマキチョウ

8

春田俊郎

帽子の中に入ったので取り出そうと思ふうちに逃げた。中村はもう夢中でその蝶を追いかけて、近くの花にとまっていた。再びふるえる手に持った帽子で伏せ、やっとならぶことができた。おもむろに蝶を取り出したときは中村はへなへなとその場に坐りこんでしまう程緊張していた。

中村はこの蝶を手早く折った三角紙に納め、宝物のように慎重に扱いたが、うな顔を見て、辻本、三枝の二人は、「おい、虎の子はどうした?」「虎の子は無事か?」と休むたびに中村を冷やかし。

七月十九日に鹿島槍の往復を果たした二十日には岩小屋沢を越えて新越乗越に幕営、二十一日には赤沢岳を経てスバリ乗越に着いた。人夫達が雪を掘ったり、薪を集めたりしている時、中村は例によって小箱を取り出し、「虎の子蝶」を眺めようとした。箱を開けた

茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

ブータン感傷旅行

小方全弘著

〈菊判280頁〉定価980円

森林・草原・氷河

加藤泰安著

〈A5判482頁〉定価1,500円

すこし昔の話

初見一雄著

〈四六判400頁〉定価1,200円

遠い山・近い山

望月達夫著

〈B6判334頁〉定価960円

山の古典と共に

大島堅造著

〈四六判280頁〉定価1,500円

雪山・藪山

川崎精雄著

〈A5変型判340頁〉定価1,200円

雪原の足あと

坂本直行著

〈B5判206頁〉定価2,800円

いろいろばた

南会津山の会

〈B24どり判320頁〉定価1,900円

山日記1972年版

日本山岳会編

〈A6判368頁〉定価750円

山 岳

日本山岳会編

〈A5判〉

総索引	1,000円
65年	2,000円
64年	2,000円
63年	2,200円
62年	2,000円
61年	1,800円

国立公園カレンダー

国立公園協会編

〈A5判リング綴り〉定価960円

屋久島・美しい豊かな自然

赤星 昌編

〈B6判202頁〉定価480円

山で唄う歌1集・2集

戸野昭・朝倉宏編

〈A6判126頁〉1集240円・2集280円

シブトンの自叙伝

未踏の山河

大賀二郎・倉知敬記

〈A5判440頁〉定価1,900円

日高山脈

北大山の会編

〈菊判362頁〉定価2,200円

山に忘れたパイプ

藤島敏男著

〈菊判584頁〉定価2,500円

日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖

〈A変型208頁〉定価3,600円

アンナプルナ日記

京都大学学士山岳会編

〈A12取変型判170頁〉定価1,200円

登頂ゴジュンバ・カン

高橋 進編

〈A5判350頁〉定価900円

登山・スキー用具専門店

●買い易い
山の店

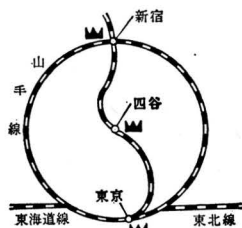
山の店

●北へ来たら
山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101

TEL. 06(362)5736

●フレッシュな
山の店



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地

TEL (351) 7432-1912

八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五

TEL (271) 1560-8575

新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ

TEL (352) 6564

日本信販加盟店



山友社 たかはこ

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9

片桐 盛之助

電話 東京(831) 1794・6680番

なるべく なんにも
持たない方がいい
けれど、どうしても
要するものがある。
なにしろ人間ですから
そして、登山ですから
どうしても必要なもの
をこしらえておきます
主責任は、もっています

たろぐンティ
でんや 281-8456
中央区・八重洲4の1

香山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1

PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘



東京店・中央区銀座2-4-5 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座2-4-4 (561)0966 スキー店
大阪店・北区曽根崎上一丁目47 (364) 0933 (代)
福岡店・須崎町1-4 (28) 3440